常木：スフールでのビーズの発見が報告されたが、あれによればアフリカと同時期に他地域でも象徴行動があったということか。

佐藤：その可能性が高い。ロシアでは、骨角製の針は従来 2.5 万年前といわれていたが、年代測定しなおすとかなり古くなることがわかっている。したがって、スフールのビーズがそれくらいまで遡ってもおかしくはない。新しく年代測定をすれば、同様に古い事例がたくさん出てくると思う。

常木：アフリカにおける中期石器時代（Middle Stone Age）の年代測定は何を対象として行われたのか。14C による年代測定では、7 万年前の測定値を出すことは困難なのではないか。

佐藤：層位的に出土した炭化物が対象となっている。14C 年代測定によって 7 万年前の測定値を出すことは可能である。

西秋：スフールは 10 から 13 万年前とされていて、南アフリカのブロンブス遺跡において出土した遺物のほとんどがそろっている。アフリカから人がやってきたのだと思う。

大沼：スフール遺跡は石器のヴァリエイションが著しい。また、非常に丁寧なつくりである。

藤井：プロジェクトのテーマにはセム系と部族とが入っているが、佐藤先生のいう部族の定義は文献の人の定義とは違うのか。

佐藤：私は民族学や人類学でいわれている社会形態の一形態としてとらえている。

藤井：バンドと部族はどう違うのか。

佐藤：いくつかの部族があつまってバンド。バンドは生活している単位。部族社会をどうとらえるかでかわる。

西秋：人類学的部族と中東で言う部族は同じか。

佐藤：それは異なるのでは。

藤井：それはきちんと定義したほうがよい。

佐藤：人類学では部族は一番大きな単位。部族社会がトップにあると考えているが、人間集団は階層的には捉えられない。

藤井：実態は？実態として部族を捉えられるのか。

佐藤：石器や石材の流通関係から判断しているのみ。漠然とこれくらいの規模などとしか言及できない。

藤井：ではそこから判断されるまとまりを便宜的に部族としているだけか。

佐藤：そうだ。漠然とそのようにとらえているだけなので、皆さんの使い方しだいでは呼称をかえるかも。

石田（英）：西アジアにおける部族の研究では、血縁集団と地縁集団両方を示す場合があるのか。

藤井：両方ともにある。生活の上にある何らかのまとまりをどこまで遡れるのかということか。

大沼：藤井さんのいう部族は地縁関係を含むのか。

藤井：そうだ。ここではセムとしているからより強い紐帯をもったまとまりかと思ってしまいがちだが。

佐藤：考古学的現象から部族を捉える。

西秋：それは文化ではないのか。

佐藤：必ずしもそうではない。抽象的な議論はできるが、考古学的現象と人間社会をどのようにすり合わせるのかが問題である。

石田（英）：やはり部族のイメージを明示するべきである。

藤井：部族のイメージ（定義）は難しい。